

言葉で表す

杏林大学教授

金田一

秀穂

わたしたちは言葉で何かを表します。例えば、「今日学校に来た」と言います。しかし、それは本当に、わたしたちが学校に来たことを表しているのでしょうか。

例えば、それぞれの人は、違う経過をたどって、学校に来たはずですが、でも、それぞれの違いを一切無視して、わたしたちは「学校に来た」と言ってしまう。

ある人は歩いて、ある人はバスに乗って、ある人は車に乗って、ある人は電車に乗って、学校に来たかもしれません。そういう違いを無視して、「学校に来た」と言ってしまうというものでしょうか。「来た」というたった一つの動詞で、それぞれの行為をまとめてしまっているのでしょうか。

同じことをしていても、人によって違う言葉で表されることがあります。例えば「死ぬ」

ん。それらをすべて、「来た」という動詞で表してしまっているのでしょうか。

わたしたちはしかし、同じ「来た」ことを区別することが出来ます。わたしが今、上に書いたようなことをして区別します。つまり、「来た」という動詞にさまざまな言葉をくっつけて、「来た」という行為を、より精密に表すのです。これを「修飾」と言います。「あたふた来た」「駆けて来た」「遅く来た」「電車で来た」、これらすべては、他の言葉で「来た」という行為を修飾することで、「来た」という事柄を、より精密に、よりきめ細かく、より限定的に表します。

では、同じ「ゆっくり来た」は、同じことをしたといえるのでしょうか。ある人は、途中で足が痛くなって、ゆっくり歩いたかもしれません。ある人は宿題を忘れて、すっかり憂鬱になって、足取り重く、やって来たのかもしれない。ですから、もつともつと修飾しなければなりません。

わたしたちはこの世界をさまざまに表現します。自分の考えを言葉で表現します。自分が感じたり、思ったことを、言葉で表します。そうして、ほかの人がどんなことを考えたり感じたりしているかを、言葉によって理解します。

ということは、高貴な人が死んだ場合は「崩御する」、長生きした人は「長寿を全うする」など、それぞれ表す動詞が異なります。

動物が何かの声を発することは、その動物の種類によって、違う言葉で表されます。馬はいななく、小鳥はさえずる、虫はすだく、犬は吠える、猫は鳴く。

衣類を身に着けるとき、その衣類が何かによって、違う言葉が選ばれます。帽子はかぶる、シャツは着る、ズボンは履く、ベルトは締める、めがねはかける。

わたしたちはこのように、その動作全体を、異なる言葉で表すということをします。だったら、同じように、「来る」ということを、違う言葉で表してもいいはずですが。

英語には人称変化ということがあって、わたしとあなたとあの人のすることは違う、と

もちろん、人は言葉だけで表現するわけはありません。身体を動かすことで、表情を変えられることで、あるいは絵を描くことで、歌を歌うことで、音楽を作ること、あるいはマンガを書くことで、自分の気持ちを表現できます。優れたコックさんであれば料理を作ること、掃除の好きな人はその掃除の仕方によって、自分を表現できるかもしれません。でも、多くの人にとって、自分を表現し、またほかの人を理解する手がかりは、言葉なのです。言葉だけが、自己表現をとっても簡単にとても効果的に行うのです。

しかし、言葉は、それを上手に使わないと、先ほど見てきたように、そんなに精密に、細かく自分を表現することが出来ません。でも、それは使い方によります。もし自分だけの行為をほかの人にわかるように言葉で表せたら、それはとても素敵なことだと思いませんか。

ほかの誰でもなく自分だけの「学校へ来た」ということを表してみる。更に言えば、昨日までの「来た」とも違う、今日あなたがした、一回限りの「来た」という行為を、言葉に換えてみることはできないでしょうか。あなたの「来た」と友達「来た」がどう違うか。それはとても長い文章になってしまうかもしれ

いうことを言葉で示します。be動詞が変化するのは、わたしの場合、あなたの場合、あの人の場合で、それぞれ違うのだということを示したいからです。

ついでに言えば、物事が一つであるか、それとも複数あるか、ということも区別して表現したいと考えるのが英語で、sを付いたり付かなかつたりします。

日本語の動詞の「来る」は、動作主によって変化することがありません。それでいいのでしょうか。

ある人は道の途中で寄り道したかもしれません。ある人は忘れ物を取りに一度来た道を戻ってまたやって来たのかもしれない。ある人は友だちとおしゃべりしながらのんびり来たかもしれません。ある人は遅刻しそうなって大慌てで駆け出して来たかもしれません。

けれども、一度挑戦してみる価値があると思います。そうして、そういうことをすることが、言葉を大切にすると、とうとうとわたしは思います。



金田一 秀穂 (きんだいち ひでほ)

1953年、東京都生まれ。

日本語研究を専門とし、海外での日本語教育経験も豊富。ハーバード大学客員研究員を経て、現在は杏林大学外国語学部教授を務める。講演会やメディアなどでも活躍。『知っていますか? つい間違える日本語』(監修・大和書房)『ふしぎ日本語ゼミナール』(日本放送出版協会)など著書多数。